

坂東本のハ行転呼について

青柳英司

一、問題の所在

ハ行転呼は、和語の語中・語尾のハ行音（ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ）がワ行音（ワ・ヰ・ウ・エ・ヲ）に変わるといふ現象であり、平安時代の後期（十一世紀）頃から一般化したとされる。そして、浄土真宗の開祖とされる親鸞（一一七三—一二六二）が生きたのは、このような音韻の変化が、仮名の表記にも反映されていく時代であった。¹⁾そのため、親鸞の著作や書簡にも、古用と合致しない仮名の表記が多く見られ、すでに以下のような研究が蓄積されている。

- ① 吉澤義則「親鸞上人の写語法」（『国語国文の研究』、岩波書店、一九二七年）
- ② 藤谷一海「親鸞聖人の仮名遣に就て」（『大谷学報』一七（三）、大谷学会、一九三六年）
- ③ 梯俊夫「真宗と国語」（『高田学報』三一、高田学会、一九四二年）
- ④ 常磐井猷磨「親鸞聖人の特殊仮名遣について」（『真宗研究』二、真宗連合学会、一九五六年）
- ⑤ 小林芳規「鎌倉時代語資料としての草稿本教行信証古点」
（『東洋大学大学院紀要』二、東洋大学大学院、一九六五年）
- ⑥ 山内育男「かなづかいの歴史」（『講座国語史』二、大修館書店、一九七二年）

- ⑦ 門川徹真「真蹟本に見る親鸞聖人のかなの用法」(『真宗研究』二二、真宗連合学会、一九七六年)
- ⑧ 金子彰「親鸞の仮名づかい」(『国文学攷』七六、広島大学国語国文学会、一九七八年)
- ⑨ 金子彰「世代差と表記差―院政後期・鎌倉初期書写の仮名書状のハ行音表記を視点として―」
(『鎌倉時代語研究』一〇、武蔵野書院、一九八七年)
- ⑩ 佐々木勇「親鸞遺文における「オハ」等の仮名遣い開始時期と異例について―漢文の訓点における実態調査とその位置づけ」(『国文学攷』二〇九、広島大学国語国文学会、二〇一一年)

先学の研究によって、

- (1) 親鸞は二文字以上の単語の語頭に「ヲ」を用いず、また「をば・をや・をも」などは基本的に「オハ・オヤ・オモ」などと表記していたこと。
- (2) 右の仮名遣いのうち、前者は三十代半ばまでの段階ですでに実践されていたが、後者は三十代後半から五十八歳頃までのある時点で開始されたこと。
- (3) 「ヲ」の仮名遣いの他にも、親鸞の著作には古用に合わない仮名表記が少なくないものの、同一の語は一定の仮名遣いで表記する傾向が見られること。³⁾
- (4) 親鸞のハ行音の表記は、以前の世代に比べてハ行転呼する例が多くなっていること。⁴⁾などが明らかとなった。

他方、親鸞の名著とされる『顕浄土真実教行証文類』(以下『教行信証』)の文献学的な研究、特に現存する唯一の真蹟本である坂東本の研究も大きく進んでおり、

⑪ 重見一行『教行信証の研究』（法藏館、一九八一年）

⑫ 鳥越正道『最終稿本教行信証の復元研究』（法藏館、一九九七年）

など、重要な成果が報告されている。これによって、坂東本の成立過程や各部の執筆時期などは、概ね解明されてきたと言える。

以上のような研究状況を概観すると、親鸞の仮名遣いに関する研究は和文著作が中心となっており、漢文著作である坂東本の仮名表記（訓点）の特徴を、⑪・⑫の成果を踏まえて検討する作業は、未だ十分でない点が残されているように思われる。そこで本稿では、先行研究も注目する坂東本の八行転呼の状況を改めて調査し、親鸞の仮名表記の特徴を明らかにする一助としたい。

二、坂東本の八行転呼

ここでは坂東本における八行転呼の例を、八行の各音に分けて取り上げる⁵⁾。また、非転呼の八行音表記の数も、比較のために挙げた。

は↓は（非転呼）

395例（右訓・341例、左訓・54例）

は↓わ

アチワイ（味）

行・三四・五・左訓（後）

アチワイ (味)	化本・四六九・五・右訓 (前)
アツカワシ (蒸)	信・二七〇・六・右訓 (後)
アラワルト (彰)	信・二四二・五・右訓 (後)
アラワサ (標)	信・二四三・四・右訓 (後)
アラワレテ (顯而)	化本・五五一・二・右訓 (前)
アワ (値)	信・一七八・七・右訓 (前)
アワレム (憐)	行・六七・七・左訓 (前)
アワレミ (憐)	行・九一・七・左訓 (前)
アワレム (憫)	行・九一・七・左訓 (前)
アワレミ (仁)	行・九六・三・左訓 (前)
アワレム (憐愍)	行・一四四・一・左訓 (前)
アワレフ (憫)	信・一八九・二・左訓 (前)
アワレム (憐)	信・一九六・七・左訓 (前)
アワレム (哀)	信・二〇八・六・左訓 (前)
イソカワシ (急)	信・一六三・二・左訓 (前)
イタワシ (勞)	行・九八・六・左訓 (前)
イツワル (僞)	行・五六・三・左訓 (前)
イツワル (僞)	行・二二五・一・左訓 (前)
イツワル (僞)	行・二二九・八・左訓 (前)

イツワル	(偽)	信・一六二・六・左訓	(前)
イツワリ	(奸)	信・一六二・六・左訓	(前)
イツワル	(詐)	信・一六二・六・左訓	(前)
イツワリ	(詐)	信・一七八・五・左訓	(前)
イツワリ	(詐)	信・一九二・二・左訓	(前)
イツワリ	(詐)	信・二八四・八・右訓	(後)
イツワレリト	(詐)	信・二八五・一・右訓	(後)
イツワル	(偽)	証・三七五・六・左訓	(前)
イツワル	(憤)	真・四一・一・左訓	(前)
イツワル	(鬧)	真・四一・一・左訓	(前)
イツワル	(偽)	化本・五四五・七・左訓	(前)
イツワリ	(矯)	化末・六三六・八・左訓	(前)
イツワル	(偽)	化末・六五八・一・左訓	(前)
イツワリ	(偽)	化末・六五八・八・左訓	(前)
イワク	(導)	行・八四・四・右訓	(前)
〔イ〕ワク	(謂)	行・一〇八・二・右訓	(前)
イワマク	(言)	信・二七四・八・右訓	(後)
ウツワモノ	(器)	証・三六〇・六・左訓	(前)
ウケタマワル	(奉)	信・一六七・八・左訓	(前)

ウ ル ワ シ	(端)	行・八一・六・左訓(前)
オ ホ ワ	(覆)	真・四〇八・五・右訓(前)
カ タ ワ ラ ニ シ テ	(傍)	行・一〇五・六・右訓(前)
キ ワ	(際)	証・三四六・八・左訓(前)
キ ワ	(際)	証・三七三・五・左訓(前)
キ ワ	(際)	真・四三四・六・左訓(前)
キ ワ	(際)	真・四六〇・三・左訓(前)
キ ワ	(際)	化本・五四〇・三・右訓(前)
キ ワ	(際)	化本・五四五・八・左訓(前)
キ ワ	(齊)	化末・六三三・七・左訓(前)
キ ワ ム	(尅)	行・七七・八・左訓(前)
キ ワ メ	(躬)	行・九六・二・右訓(前)
キ ワ メ	(窮)	行・一一四・三・右訓(異)
キ ワ メ	(窮)	行・一三一・七・左訓(前)
キ ワ ム ル カ	(窮)	信・二四七・六・右訓(後)
キ ワ マ ル	(竟)	証・三三二・一・左訓(前)
キ ワ メ	(究)	証・三三四・三・左訓(前)
キ ワ ム	(竟)	証・三三四・三・左訓(前)
キ ワ メ	(窮)	真・三九四・七・左訓(前)

キワメ	(窮)	真・三九・七・左訓	(前)
キワマリ	(窮)	真・四四・八・一・左訓	(前)
キワムルコト	(窮)	化末・六四・八・七・右訓	(前)
キワメント	(窮)	化末・六四・九・八・右訓	(前)
クワウ	(加)	行・五〇・五・左訓	(前)
クワウ	(加)	行・一三・六・三・左訓	(前)
クワウ	(加)	証・三四・七・一・左訓	(前)
クワシ	(委)	行・五四・七・左訓	(前)
クワシ	(細綿)	行・七八・六・左訓	(前)
クワシク	(委)	行・九八・八・右訓	(前)
クワシ	(細)	化末・六六・四・一・左訓	(前)
クルワサレテ	(著)	信・二九・三・二・右訓	(後)
コワク	(怯)	信・一七・七・六・左訓	(前)
コワシト	(強)	信・二四・二・三・右訓	(後)
コワクシテ	(強)	化末・六五・九・三・右訓	(前)
サイワイ	(福)	化本・四九・八・四・左訓	(前)
サイワイ	(福)	化末・六二・九・二・左訓	(前)
サワト	(澤)	信・一七・八・七・右訓	(前)
サワリ	(礙)	行・六八・五・右訓	(前)

サワリ	信・一六八・一・左訓(前)
サワリ	信・一七四・四・右訓(前)
サワル	行・三六・七・左訓(後)
サワル	行・九四・五・左訓(前)
スナワチ	信・二四〇・二・右訓(後)
スナワチ	信・二五二・七・右訓(後)
スナワチ	信・二六九・二・右訓(後)
スナワチ	信・二七九・八・右訓(後)
スナワチノ	信・二九九・七・右訓(前)
スナワチ	信・三〇〇・三・右訓(前)
スナワチ	化本・四七一・三・右訓(前)
スナワチ	化末・六五三・八・右訓(前)
スナワウ	化本・五六五・二・左訓(前)
スナワウ	化本・五六五・五・左訓(前)
スナワウ	化本・五六五・七・左訓(前)
スナワウ	信・二一一・七・左訓(前)
タワフル	証・三四二・四・左訓(前)
タワフル	証・三七七・六・左訓(前)
タワフレ	化末・六二六・八・左訓(前)

- ツタワリテ (傳) 化末・六四一・三・右訓 (前)
ツワモノヲ (兵) 信・三〇二・七・右訓 (前)
ツワモノ (兵) 化末・六五四・五・左訓 (前)
トラワレテ (囚) 化末・六五六・七・左訓 (前)
ナリワイ (業) 真・四四一・一・左訓 (前)
ニワ (場) 化本・四六八・一・左訓 (前)
ニワカニ (頓) 行・九七・一・左訓 (前)
ヘツラワス (詔) 信・一九二・二・左訓 (前)
マシワルコト (雜) 行・八六・六・右訓 (前)
マシワリ (交) 信・一七五・五・右訓 (前)
マシワリ (參) 信・二四八・八・右訓 (後)
マシワル (交) 化本・四六九・二・左訓 (前)
マシワル (交) 化本・四九九・一・右訓 (前)
マシワリ (交) 化本・五三九・八・右訓 (前)
マツワル (纏) 真・四四三・頭註・右訓 (前)
ミソナワス (見) 真・四二八・二・右訓 (異)
ミタリカワシク (猥) 化末・六六六・四・右訓 (前)
ワサワイ (禍) 行・一一〇・七・左訓 (前)
ワサワイ (禍) 化本・五一五・七・左訓 (前)

ワサワイ (災) 化本・五六一・三・左訓 (前)
 ワサワイ (禍) 化末・六二九・二・左訓 (前)
 ワサワイ (災) 化末・六五五・四・左訓 (前)
 ワサワイ (災) 化末・六六〇・四・左訓 (前)
 ワサワイ (禍) 化末・六六〇・五・左訓 (前)
 ラワル (畢) 行・五三・六・左訓 (前)
 オワル (訖) 化末・六三九・五・左訓 (前)

ひ↓ひ (非転呼)

133例 (右訓・121例、左訓・12例)

ひ↓ゐ

イヅ (飯) 化末・六三九・一・左訓 (前)
 イヅ (飯) 化末・六三九・七・左訓 (前)
 ミ、シヅ (聾) 化末・六四八・七・左訓 (前)

ひ↓い

アイ (値) 行・一〇三・一・左訓 (前)
 [ア]イ (相) 行・二二六・六・右訓 (前)

アイ(相)	真・四三七・八・右訓(前)
アイ(相)	化末・六三三・四・左訓(前)
アイタ(頃)	行・九〇・三・右訓(前)
アイタニ(傾)	行・九〇・三・右訓(前)
アキナイ(商)	真・四二三・一・左訓(前)
アタイ(價)	化本・五五八・七・左訓(前)
アチワイ(味)	行・三四・五・左訓(後)
アチワイ(味)	化本・四六九・五・右訓(前)
アラソイ(競)	化末・六四七・六・左訓(前)
イトイ(厭)	化末・六二九・七・左訓(前)
オイ(甥)	化末・六三〇・三・左訓(前)
オイ(甥)	化末・六三一・三・左訓(前)
オイ、タス(擯)	化末・六二六・八・左訓(前)
オシマトヒテ(麾)	化末・六四八・七・右訓(前)
カナイテ(稱)	化本・五〇四・三・右訓(前)
カナイ(冥)	化本・五二九・三・左訓(前)
キヨイ(競)	化末・六五四・一・右訓(前)
キライテ(簡)	信・三一七・五・右訓(前)
クルイ(詒)	化末・六二七・五・左訓(前)

サイワイ (福)	化本・四九八・四・左訓 (前)
サイワイ (福)	化末・六二九・二・左訓 (前)
サカイ (境)	行・六八・一・左訓 (前)
サカイ (境)	行・九五・七・左訓 (前)
サカイ (域)	行・一四〇・一・左訓 (前)
サカイ (境)	信・二一四・五・左訓 (前)
サカイ (境)	真・四四八・六・左訓 (前)
サカイ (界)	真・四四八・六・左訓 (前)
シタカイ (服)	行・五〇・三・左訓 (前)
シタカイ (伏)	真・四四三・三・左訓 (前)
タカイニ (送)	信・一八〇・四・右訓 (前)
タクイ (類)	証・三八一・三・左訓 (前)
タトイ (縦)	化本・五〇四・六・右訓 (前)
タマシイ (識)	行・六七・六・左訓 (前)
タマシイ (精氣)	化末・六二〇・三・左訓 (中)
タマシイ (神)	化末・六三四・七・左訓 (前)
ツイニ (遂)	行・六〇・二・右訓 (前)
ツイニ (遂)	行・八九・七・右訓 (前)
ツイニ (畢)	信・一九七・七・右訓 (後)

ツイニ(畢)	信・一九八・四・右訓(後)
ツイニ(畢)	信・一九九・一・右訓(後)
ツイニ(畢)	信・一九九・六・右訓(後)
ツイニ(了)	信・二二三・一・右訓(後)
ツイニ(竟)	信・二六〇・三・右訓(後)
ツイニ(遂)	信・二六〇・五・右訓(後)
ツイニ(遂)	信・二六二・八・右訓(後)
〔ツ〕イニ(終)	化本・四九七・四・右訓(前)
ツイ(遂)	化本・五五四・四・左訓(前)
ツイ(遂)	化本・五六一・三・左訓(前)
ツイニ(畢竟)	化末・六三六・六・右訓(前)
〔ツ〕イニ(終)	化末・六六一・三・右訓(前)
ナリワイ(業)	真・四四一・一・左訓(前)
ネカイ(忻)	信・一六五・三・左訓(前)
ネカイ(忻)	化本・四八八・八・左訓(前)
ネカイ(忻)	化本・五一〇・一・左訓(前)
ハカライ(壽)	化本・五四四・七・左訓(前)
マトイカ(惑)	行・一〇一・八・右訓(前)
マトイ(惑)	信・一七二・一・左訓(前)

マトイ(迷)	化末・六二九・五・左訓(前)
ヨソオイ(勢)	化末・六四七・六・左訓(前)
ヨソオイ(威)	化末・六四九・一・左訓(前)
ヨハイ(喚)	行・八三・一・右訓(前)
ヨロイ(鎧)	行・一一七・五・左訓(前)
ヨロイ(鎧)	証・三四七・七・左訓(前)
ワサワイ(禍)	行・一一〇・七・左訓(前)
ワサワイ(禍)	化本・五一五・七・左訓(前)
ワサワイ(災)	化本・五六一・三・左訓(前)
ワサワイ(禍)	化末・六二九・二・左訓(前)
ワサワイ(災)	化末・六五五・四・左訓(前)
ワサワイ(災)	化末・六六〇・四・左訓(前)
ワサワイ(禍)	化末・六六〇・五・左訓(前)

ふ↓ふ(非転呼)
 534例(右訓・433例、左訓・101例)

ふ↓う

アウ(會)

信・一九〇・八・左訓(前)

アタウ(施)	信・一九六・八・左訓(前)
アツマリアウ(會)	化末・六二一・七・左訓(中)
ウケコウ(請)	化末・六二九・四・左訓(前)
ウハウ(奪)	真・三九五・四・左訓(前)
ウルウ(閏)	化末・六六八・三・左訓(前)
ウルオウ(濕)	証・三三六・七・左訓(前)
ウルオウ(潤)	真・四五四・二・左訓(前)
オコナウ(講)	化本・四六八・八・左訓(前)
オコナウ(修)	化末・六七三・二・左訓(前)
オ、ウ(覆)	行・七五・頭註・左訓(前)
オ、ウ(暎)	真・三九五・四・左訓(前)
オ、ウ(蔽)	真・三九五・四・左訓(前)
オ、ウ(掩)	真・三九五・四・左訓(前)
オ、ウ(蓋)	化本・四六九・二・左訓(前)
カナウ(證)	行・九七・一・左訓(前)
カナウ(楷)	化末・六四五・四・左訓(前)
カウル(易)	真・四二五・八・左訓(前)
カウル(易)	化本・五六五・四・左訓(前)
カヨウ(通)	行・一二八・四・左訓(前)

キヲウ	(嫌)	信・一七九・六・左訓	(前)
クヲウ	(噉)	行・五九・八・左訓	(前)
クルウ	(狂)	行・五九・八・左訓	(前)
クルウ	(狂)	行・九七・五・左訓	(前)
クルウトモ	(著)	真・三九五・二・左訓	(前)
クルウ	(誑)	真・四五・一・五・左訓	(前)
クルウ	(誑)	化末・六六二・五・左訓	(前)
クワウ	(加)	行・五〇・五・左訓	(前)
クワウ	(加)	行・一三六・三・左訓	(前)
クワウ	(加)	証・三四七・一・左訓	(前)
クウ	(乞)	行・五〇・六・左訓	(前)
クウ	(乞)	行・一三六・三・左訓	(前)
クウ	(請)	化本・四八三・四・左訓	(前)
クウ	(乞)	化末・六二九・四・左訓	(前)
クウトモ	(戀)	行・九七・四・左訓	(前)
クタウ	(酬)	真・四四六・四・左訓	(前)
クタウ	(酬)	真・四五九・三・左訓	(前)
クタウ	(報)	化末・六三一・三・左訓	(前)
クタウ	(答)	化末・六三四・五・左訓	(前)

- | | |
|------------|-----------------|
| コノミネカウ (樂) | 化本・五〇三・三・左訓 (前) |
| サカウ (範) | 化本・五五〇・五・左訓 (前) |
| サウル (礙) | 証・三七三・八・左訓 (前) |
| シタウ (戀) | 行・九七・四・左訓 (前) |
| シタウ (慕) | 化本・四八八・八・左訓 (前) |
| ソコナウ (害) | 化末・六二九・八・左訓 (前) |
| タクワウ (畜) | 化本・五六五・二・左訓 (前) |
| タクワウル (畜) | 化本・五六五・五・左訓 (前) |
| タクワウ (畜) | 化本・五六五・七・左訓 (前) |
| タトウ (類) | 証・三四九・三・左訓 (前) |
| ツカウ (奉) | 行・一三四・一・右訓 (前) |
| ツカウ (奉) | 信・一九〇・六・左訓 (前) |
| ツカウ (奉) | 信・三二一・八・左訓 (前) |
| ツクノウ (債) | 化末・六五一・四・左訓 (前) |
| ツクリツタウ (譯) | 真・四二四・一・左訓 (前) |
| ツクロウ (修) | 化本・五四五・六・左訓 (前) |
| ツタウ (傳) | 信・一九二・一・左訓 (前) |
| ト、ノウ (調) | 信・二九九・一・左訓 (前) |
| ト、ノウ (調) | 信・三二一・八・左訓 (前) |

ナスラウ (准)	化本・五一・三・左訓 (前)
ナラウ (習)	証・三五三・一・左訓 (前)
ナラウ (習)	真・四三二・一・左訓 (前)
ナラウ (習)	真・四五二・一・左訓 (前)
ナラウ (習)	化本・四七二・六・左訓 (前)
ハカラウ (議)	行・一三四・六・左訓 (前)
ハカラウ (議)	証・三三五・二・左訓 (前)
ハカラウ (義)	証・三五二・二・左訓 (前)
ヘツラウ (偽)	化本・五〇〇・三・左訓 (前)
ヘツラウ (偽)	化本・五〇一・一・左訓 (前)
マトウテ (纏)	信・一八〇・七・右訓 (前)
マツウ (纏)	化末・六三三・三・左訓 (前)
マトウ (惑)	化末・六二七・五・左訓 (前)
[ムカ] ウルラ (向)	行・六九・六・右訓 (前)
ムカウ (對)	行・一二八・一・左訓 (前)
ムカウ (對)	信・一七三・三・左訓 (前)
ムカウ (對)	化本・五〇三・六・左訓 (前)
ムクウ (報)	信・三〇〇・二・右訓 (前)
ムクウ (謝)	化本・五四二・六・左訓 (前)

ヤシナウ(養)

信・一七三・二・左訓(前)

ヨハウ(喚)

行・七七・三・左訓(前)

ヨハウテ(喚)

信・一七七・三・右訓(前)

ワキマウ(辯)

行・九二・四・左訓(前)

ワキマウ(辯)

行・一二八・五・左訓(前)

ワキマウ(辯)

信・三一六・七・左訓(前)

ワキマウ(辯)

化本・五四三・三・左訓(前)

ワキマウ(辯)

化末・六三二・六・左訓(前)

ふ↓を

アラク(仰)

化末・六七一・三・右訓(前)

へ↓へ(非転呼)

468例(右訓・444例、左訓・23例、その他・1例)

へ↓ゑ

イエ(屋)

証・三七八・三・左訓(前)

イエ(宇)

証・三七八・三・左訓(前)

イエ(舎)

化本・五〇五・二・左訓(前)

イエノ反(宇)	化本・五五一・三・左訓(前)
イエ(宇)	化本・五五一・三・左訓(前)
イエトス(家)	化末・六四三・六・右訓(前)
イエ(樓)	化末・六五五・八・左訓(前)

へ↓え

アエル(値)	行・二五・三・右訓(後)
アエテ(敢)	行・九三・七・右訓(前)
アエテ(敢)	証・三三九・八・右訓(前)
アエテ(敢)	証・三四八・八・右訓(前)
ウルホエル(濕)	化本・五四七・二・右訓(前)
オ、エルカ(覆)	真・四二七・四・右訓(異)
カソエムニ(計)	真・三九四・六・右訓(前)
カナエ(錫)	化本・五六五・三・左訓(前)
ソエテ(傍)	行・五〇・四・右訓(前)
タエタリ(堪)	信・二三七・五・右訓(後)
タエム(勝)	信・二四三・二・右訓(後)
トナエテ(唱)	信・二六三・六・右訓(後)
〔ヒト〕エニ(偏)	行・一四三・五・右訓(前)

ワ〔キ〕マエム〔辯〕 化末・六四六・八・右訓〔前〕
 〔ヲシ〕エテ 化本・五二四・三・右訓〔前〕
 オエテ〔終〕 信・三二〇・七・右訓〔前〕

ほ↓ほ〔非転呼〕

52例〔右訓…33例、左訓…19例〕

ほ↓を

ウルヲス〔潤〕 信・一七三・二・左訓〔前〕
 ウルヲス〔濕〕 信・一七五・五・右訓〔前〕
 カヲハセ〔兒〕 行・七八・一・右訓〔前〕
 カヲハセ〔顔〕 証・三三四・一・左訓〔前〕
 カヲハセ〔貌〕 証・三三四・一・左訓〔前〕
 カヲハセ〔容〕 証・三三四・一・左訓〔前〕
 カヲハセ〔顔〕 証・三三九・二・左訓〔前〕
 カヲハセ〔容〕 証・三三九・二・左訓〔前〕
 クルヲサル〔着〕 化本・四七六・一・右訓〔前〕
 スナヲ、〔質〕 化末・六四八・四・右訓〔前〕
 トヲク〔遠〕 総序・四・五・右訓〔後〕

トヲリ (徹)

行・九四・三・左訓 (前)

〔ナ〕ヲ (猶)

信・二五九・五・右訓 (後)

〔ナ〕ヲ (猶)

真・四一四・五・右訓 (前)

〔ナ〕ヲ (猶)

真・四一六・四・右訓 (前)

〔ナ〕ヲ (尚)

真・四四二・八・右訓 (前)

ナヲ (尚)

化本・五〇四・六・右訓 (前)

〔ナ〕ヲ (尚)

化本・五〇四・八・右訓 (前)

〔ナ〕ヲ (猶)

化末・六四八・六・右訓 (前)

ナヲシ (端)

行・八一・六・右訓 (前)

ナヲシ (端)

証・三三四・一・左訓 (前)

ナヲシ (端)

証・三三九・二・左訓 (前)

ホノヲ (焰)

信・一七五・頭註・右訓 (前)

ホノヲ (燄)

信・一七五・五・左訓 (前)

ホノヲ (炎)

真・三九八・七・左訓 (前)

ほ↓お

イキオヒ (勢)

信・二九九・五・右訓 (前)

ウルオウ (濕)

証・三三六・七・左訓 (前)

ウルオフ (濕)

証・三五三・七・左訓 (前)

ウルオウ(潤)

真・四五四・二・左訓(前)

オ、キナル(矜)

化末・六七一・二・左訓(前)

オ、シ(衆)

化末・六五一・一・右訓(前)

オ、ウ(覆)

行・七五・頭註・左訓(前)

オ、ウ(暎)

真・三九五・四・左訓(前)

オ、ウ(蔽)

真・三九五・四・左訓(前)

オ、ウ(掩)

真・三九五・四・左訓(前)

オ、エルカ(覆)

真・四二七・四・右訓(異)

オ、ウ(蓋)

化本・四六九・二・左訓(前)

カオハセ(顔)

信・一九〇・四・左訓(前)

クルオストモ(箸)

化末・六三三・三・左訓(前)

トオサカレ(遠)

化本・四八七・七・右訓(前)

トオリ(徹)

化本・四九六・七・右訓(前)

ホノオ(炎)

信・一七五・頭註・左訓(前)

ヨソオイ(勢)

化末・六四七・六・左訓(前)

ヨソオイ(威)

化末・六四九・一・左訓(前)

ほ
↓
う

トウセ(通)

化末・六五一・三・右訓(前)

三、坂東本におけるハ行転呼の傾向

三―I、ハ行転呼表記と非ハ行転呼表記との比較

すでに先学が指摘しているように、坂東本には同一の語であっても、ハ行転呼音で表記される場合と、そうでない場合とがある。そこで、次に坂東本の和語の語彙を、

- ① 全て古用に適う表記の語
 - ② 古用に適う表記が多数である語
 - ③ 全てハ行転呼音である語
 - ④ ハ行転呼音が多数である語
 - ⑤ どちらとも言えない語
- に分類する。

まず、①の「全て古用に適う表記の語である語」だが、これに該当するものには、「おもふ」「かへる」「こしらふ」「たまふ／たまはく」などがある。特に「たまふ／たまはく」は、坂東本に三百回以上の用例があるものの、全て古用に適う表記で統一されており、これは和文著作においても同様である⁶⁾。すなわち、「たまふ／たまはく」の表記については、親鸞の中に、かなり強い規範があったものと考えられる。

次に、②の「古用に適う表記が多数である語」だが、これに該当するものには、

- あたふ（施・供・與）ハ行転呼…1例 非ハ行転呼…10例
- あひ（相）ハ行転呼…3例 非ハ行転呼…25例

あらはす (顯・形・玄・彰・徴・箸・碑・標) ハ行転呼…3例 非ハ行転呼…23例
 いはく／いはまく (言・謂・云・導) ハ行転呼…3例 非ハ行転呼…34例
 うはふ (奪) ハ行転呼…1例 非ハ行転呼…5例
 したかふ (伏・隨・遵・順・從・服) ハ行転呼…2例 非ハ行転呼…29例
 たとふ (假令・縦・設・設使・縱使・諭・譬・類) ハ行転呼…2例 非ハ行転呼…27例
 つかふ (事・務・侍・奉) ハ行転呼…2例 非ハ行転呼…12例

などがある。「いはく／いはまく」のハ行転呼は合計三例のみであり、また「いふ」は全て古用に適う表記が為されている。同様の傾向は、和文著作においても見られる。また「したかふ」も、和文著作にハ行転呼は一例も見られなかった。これらの表記については、親鸞の中に比較的強固な規範があったものと考えられる。一方、金子〔二九七八〕によれば、「たとふ」と「あらはす」は、ハ行転呼音と非ハ行転呼音が混在している語とされていた。⁷⁾しかし坂東本では、ハ行転呼した表記は極めて少数であった。

続いて、③の「全てハ行転呼音である語」だが、これに該当するものには、

いへ (屋・宇・舎・家・樓) …7例
 きは (際・齊) …7例
 きはむ (剋・窮・躬・究・竟) …13例
 くるふ (狂・著・誑・著・諠) …8例
 わさはひ (災・禍) …7例

などがある。このうち、「いへ」に「イエ」の用例は無く、全て「イエ」と表記されている。これは、和文著作の場合も同様である。また、「きは」と「きはむ」についても、和文著作の表記は全て、ハ行転呼したものになっている。よって親鸞は、これらの語の表記について、かなり強固な規範を持っていたと考えられる。一方、「くるふ」と「わさはひ」については、和文著作に用例が無かったため、比較することができなかった。

次に、④の「ハ行転呼音が多数である語」だが、これに該当するものには、

いつはる（偽・鬧・憤・奸・矯・詐・諂）ハ行転呼…17例 非ハ行転呼…4例

うるほす／うるほふ（潤・濕）ハ行転呼…6例 非ハ行転呼…1例

かほはせ（兒・顔・容・貌）ハ行転呼…7例 非ハ行転呼…1例

すなはち（乃・尋・輒・則・便・辯）ハ行転呼…8例 非ハ行転呼…4例

つひに（遂・畢・竟・畢竟・了・終）ハ行転呼…15例 非ハ行転呼…1例

などがある。このうち、「うるほす／うるほふ」のハ行転呼の仕方は、微妙に一定しない。「ウルラス」「ウルオス」「ウルオフ」「ウルホエル」など、多様な表記が見られ、親鸞の中で規範が確立していなかった語の一つであると考えられる。一方、「いつはる」は和文著作においても、ハ行転呼音の表記が多数である。また、「すなはち」も和文著作では、一貫して「スナワチ」と表記されていた。そのため坂東本における四例の「スナハチ」は、親鸞著作全体から見ると、極めて異例のものであると言えるのである。⁸⁾「かほはせ」と「つひに」は、和文著作の中に用例が見られなかった。

最後に、⑤の「どちらとも言えない語彙」だが、これに該当するものには、

あはれむ（愛・恩・恕・仁・憐・哀・憫・愍）ハ行転呼…8例 非ハ行転呼…11例

こはし（強・怯）ハ行転呼…3例 非ハ行転呼…3例

へつらふ（僞・諂）ハ行転呼…3例 非ハ行転呼…3例

よはふ（喚）ハ行転呼…3例 非ハ行転呼…3例

わきまふ（辯）ハ行転呼…6例 非ハ行転呼…5例

などがある。金子〔一九七八〕によれば、「あはれむ」はハ行転呼の少ない語であるとされていた⁹⁾。しかし、坂東本では和文著作と比べてハ行転呼音の割合が高く、しかもそれらは全て朱筆であった。非ハ行転呼音の「あはれむ」の朱筆は、一例のみである。

その他の語については、和文著作の中に十分な用例が無かったため、比較することができなかった。

三―II、坂東本全体におけるハ行転呼の傾向

坂東本のハ行音表記を整理すると、

ハ行転呼表記 ↓ 三五一例

古用に適った表記 ↓ 一五八二例

が確認できた。すなわち、坂東本のハ行音表記のうち、ハ行転呼した表記は二割程度であったことがわかる。金子〔一九八七〕では、親鸞の書簡のハ行音表記について、

法然の弟子である親鸞の表記には、凡そ4割の、又、親鸞の妻の恵信尼には、凡そ2割の語にハ行転呼音の表記が見られる。
 (『鎌倉時代語研究』一〇・一一九頁)

と報告されているため、坂東本におけるハ行転呼は、書簡と比較して低い比率であると言える。これは、特定の読者を想定している書簡では仮名表記の規範が緩んでおり、当時の仏教界を意識した学術的な著作である『教行信証』では、仮名の表記も古用に適ったものが意識されていると、見ることができるとはないだろうか。

次に、坂東本のハ行音表記の付訓箇所について検討する。

ハ行転呼表記↓右訓…一一四例、左訓…二二七例

古用に適った表記↓右訓…一三七二例、左訓…二〇九例、その他…一例

このように、古用に適った表記は大半が右訓であったのに対して、ハ行転呼表記はおよそ三分の二が左訓であった。右訓は読み仮名や送り仮名であり、訓読の際に必須のものとなる。一方、左訓は注記的な内容が大半である。つまり、坂東本では、直接訓読には関係しない左訓において、ハ行転呼表記が多く使われる傾向があったと言える。

続いて、朱筆についてだが、坂東本のハ行転呼表記は、朱筆箇所にも、そうでない箇所にも見られた。ハ行転呼と朱筆の間に、坂東本全体を一貫する規則性は、見出し難いように思われる。¹⁰⁾

最後に、ハ行転呼表記の付訓時期について検討する。先掲の重見(一九八一)や鳥越(一九九七)の研究によって、坂東本には、

前期筆跡(親鸞五十八歳から六十三歳頃の筆跡)

中期筆跡(主な個所は「化身土巻」末の『大集経』引文。親鸞七十歳頃の筆跡)

後期筆跡(親鸞八十歳頃以降の筆跡)

異 筆（親鸞のものではない筆跡）

という四種類の筆跡のあることが知られている。これらの筆跡と、ハ行転呼表記の所在とを組み合わせると、次の通りとなる。

前期筆跡…314例

中期筆跡…2例

後期筆跡…31例

異 筆…4例

一見するとハ行転呼表記は、前期筆跡に集中しているようである。しかし、前期筆跡の割合は坂東本全体の約67%を占め、その他の筆跡の割合は約33%である。そのため、前期筆跡箇所と他の箇所とが有するハ行転呼表記の割合は、およそ四…一である。また、重見や鳥越らによる筆跡の区分は、坂東本本文（漢字部分）の染筆時期に関するものであり、訓点の記入時期に関するものではない。実際、坂東本には朱筆による訓点の訂正などが入っており、親鸞は自身の付訓を再考していた様子が看取されるのである。そのため、前期筆跡の箇所だからと言って、訓点も同時期の記入であるという保証は無い。

そこで次に、坂東本の後期筆跡箇所のうち、親鸞が八十三歳以降に書き改めた部分と、高田本『教行信証』の当該箇所におけるハ行転呼の状況を比較してみたい。高田本は、高田門徒の一人である専海（生没年不詳）が坂東本から書写した『教行信証』を、高田専修寺の真仏（一二〇九—一二五八）がさらに写したものとされる。専海が『教行信証』を書写したのは、親鸞八十三歳の年（一二五五年）であるため、専海書写本の成立以降に親鸞が書き改めた部分は、高田本に反映されていないことになる。¹¹⁾そのため、坂東本と高田本の当該箇所を比較するのであれば、親鸞が八十三歳以降の書き改めに際して、ハ行転呼表記の変更を行ったか否かを、類推することが可能となるのである。

この調査を実施した結果、高田本において非ハ行転呼表記であった訓が、坂東本においてハ行転呼表記となっている例は、一つも確認できなかった。反対に、高田本においてハ行転呼表記であった訓が、坂東本において非ハ行転呼表記となっている箇所は、一例のみが確認された。¹²⁾

もちろん、先述のように高田本は、坂東本の写本の写本であると考えられるため、書写の際に誤りが生じた可能性も考えられる。そのため、高田本が親鸞八十三歳当時の坂東本の状況を、完璧に伝えているという保証は無い。しかし、親鸞が専海書写本成立以後の書き改めにおいて、ハ行転呼表記を増やす方針に変わった可能性は、極めて低いと言えるであろう。一般に、ハ行転呼表記は平安中期から鎌倉期にかけて、次第に増えていく傾向にあるが、親鸞はこのような時代状況の中にあっても、『教行信証』のハ行転呼表記を増やそうとはしなかった。坂東本におけるハ行転呼表記の方針は、晩年の書き改めの際にも、特に変化するものではなかったと考えられるのである。

四、結びにかえて

本稿では坂東本のハ行転呼表記を収集・整理し、他の親鸞著作との比較を試みた。その結果、両者の傾向は語の次元では、基本的に同じであったと言える。特に「いふ／いはく／いはまく」などの使用頻度の高い語では、親鸞著作全体を通して極めて揺れが少なかった。すなわち、これらの語については親鸞の中に、非常に強い表記の規範があったと推測されるのである。

一方、坂東本全体におけるハ行転呼表記の使用率は、書簡と比べると半分程度でしかなかった。しかも、直接訓読に係する右訓は、大半が古用に適った表記であった。以上の点から坂東本は、意識的に古用に適う表記が多く使われた著作であったと、言い得るように思われる。実際、「たとふ」「あらはず」「すなはち」「あはれむ」などは、和文著作と比較すると、ハ行転呼の表記が少なく抑えられていた。さらに、このような方針は、晩年の書き改めの際にも変更されるもので

はなかったと考えられる。これも古用に適う表記が意識された結果であったと、見ることはできるのでないだろうか。そもそも『教行信証』は、当時の仏教界の思想的動向を、強く意識した著作であったと言える¹⁴⁾。そのため親鸞は、当時の学僧や知識人階級を意識し、公開に耐え得る内容を目指したことは、想像に難くない。それは、仮名の表記にも及んだ結果、坂東本『教行信証』は親鸞の他の著作に比べて、古用に適う表記の多い著作になったと推測することも、十分に可能ではないだろうか。

しかし、本稿においては坂東本の調査に終始し、他の漢文著作の表記について十分に調査することができなかった。この点は、今後の課題としたい。

最後になったが、本稿の執筆に際しては、親鸞仏教センター嘱託研究員・菊池弘宣氏と筆者が共同で作成した坂東本の付索引を活用させていただいた。また、東京女子大学名誉教授の金子彰氏からは、多大な助言を頂戴した。この場を借りて、両氏に厚く御礼申し上げる。

(1) たとえば、現代語で「サワ」と発音される「澤」は、『古今和歌集』などでは「さは」と表記されている。しかし、平安後期になると、「さは」の「は」の発音が変化して「わ」と同じ音となり、「さわ」と発音されるようになる。これが、ハ行転呼と呼ばれる現象である。

(2) 佐々木〔二〇一一〕、参照。

(3) 金子〔一九七八〕、参照。

(4) 金子〔一九八七〕、参照。

(5) 漢数字は『顕浄土真実教行証文類翻刻篇』（真宗大谷派宗務所、二〇一二年）の頁数と行数である。また、坂東本の漢文の筆跡は、前期・中期・後期・異筆に区分されるため、これを表わす（前）（中）（後）（異）の記号を付した。本文に無い文字は□で補い、朱筆箇所には傍線を付した。なお、本表に集めたのは明確なハ行転呼の付訓があるものだけであり、同一の語であっても、付訓の無いものは挙げていない。たとえば「すなはち」の場合、「即」という付訓例は膨大な数にのぼるが、本稿が問題とするハ行転呼の付訓ではないので対象から除外し、「則」のように、ハ行転呼の表記が明確である用例のみを採録した。

- (6) ただし、『唯信鈔』には一例のみ「タマエリ」という表記が見られる。
- (7) 金子(一九七八)一九頁、参照。
- (8) 坂東本の五例の「スナハチ」のうち、朱筆は二例のみである。
- (9) 金子(一九七八)一九頁、参照。
- (10) なお、筆者は坂東本の朱筆訓点には、異筆が混入している可能性が高いと考えている。拙稿『「教行信証」における「ヲ」の仮名遣い―坂東本の異筆訓点に関する一考察―』(『印度学仏教学研究』六九(二)、日本印度学仏教学会、二〇二〇年)、参照。しかし、ハ行転呼という視点からは、どの訓点が異筆であるかを特定することはできなかった。
- (11) 後期筆跡箇所であっても、『信巻』後半の『涅槃経』引文や、『真仏土巻』の後期筆跡箇所のように、高田本に反映されている部分もある。重見(一九八二)二三六―三三八頁、鳥越(一九九七)三四頁、参照。
- (12) 「行巻」の「壽」の左訓は、高田本では「ハカラウコ、ロナリ」であるが、坂東本では「ハカラフ」(『翻刻篇』四一頁)となっている。
- (13) 金子(一九八七)、参照。
- (14) 親鸞の師・法然房源空(一一三三―一二二二)の浄土教思想に対しては、『興福寺奏状』や『延暦寺大衆解』、高弁(一一七三―一一三三)の『摧邪輪』など、多くの批判が提示されていた。これらの批判に応答して、法然の浄土教思想の真実性を示すことが、『教行信証』の課題の一つであったと考えられている。」

※本研究は二〇二二年度東京分室PD個人研究(青柳班)の研究成果の一部である。